

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 緑色地球ネットワーク来日せまる! P2
地球環境林センター誕生 P3
●伝えよう森と沢〜チコロナイ P4



降りつづいた雨は土づくりのヤオトンにしみこみ、次つぎと屋根が落ちた(7ページ「厳冬をまえに大水害の黄土高原」参照)。

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカ・オレカを集めて送る

etc. あなたのご参加を待っています!

1995・10

40

緑色地球ネットワーク訪日団

来日せまる！ ～歓迎会、交流会にご参加を！

黄土高原での緑化協力も4年目になりました。何もわからずにはじめた協力は、あっという間に広がりました。苗木が1本1円、とにかく苗木代をおくろう、というところから、「地球環境林センター」を建設して協力の技術的な中心づくりを、というところまでこぎつけたのです。日本から現地を訪れた人たちも、280人を越えました。ネットワークは日本全国を結び、中国山西省や北京とつながっています。

そしていよいよ今月、山西省から訪日団がやってきます。日本からワーキングツアーが訪れるたびに心のこもったお世話をうけて感激したのですが、今度は私たちが迎える番です。

先月号でお願いしたカンパは、現在40万円ほど集まっています。ありがとうございます。目標は100万円で、これから大急ぎで集める必要があります。ご協力いただくと幸いです。

さて、あらためて訪日団のメンバーと日程をご紹介します。

【メンバー】

- 団 長：郭 健（共青团山西省委員会 青農部長）
副団長：劉采京（共産党大同県委員会 書記長）
秘書長：祁学峰（大同市青年連合会副 主席）
団 員：胡 果（山西日報政治教育報 道部主任）

- 団 員：劉 彪（朔州市青年連合会主 席）
楊青明（共産党靈丘県委員会 副書記長）
李田山（渾源県人民政府県長）
葛徳軍（共青团靈丘県委員会 書記長）
王黎傑（緑色地球ネットワーク北京連 絡事務所長・通訳）

【日程（予定）】

10月25日（水）

- 14時45分 関西国際空港着
19時～ 歓迎会（詳細別記）

10月26日（木）

- 終日 神戸西農協にて果樹・野菜栽 培、物流などを見学

10月27日（金）

- 午前 神戸市立森林植物園見学
午後 六甲再度山植林地見学

10月28日（土）

- 終日 奈良参観
18時～ 交流会（詳細別記）

10月29日（日）

- 終日 大阪市参観

10月30日（月）

- 午前 UNEP（国際環境技術センタ ー）参観
午後 咲くやこの花館見学

10月31日（火）

- 終日 川西市で市民生活、行政見学

11月1日（水）

- 終日 大阪府農林技術センター見学

夕刻 大阪府立農芸高校参観

11月2日（木）

終日 河内長野森林組合、林業見学
夜 歓送会

11月3日（金）

15時35分 関西国際空港から帰国

★★★★みなさんにご案内★★★★

日程にはいろいろ興味深い訪問先が ならんでいます。「私も行ってみたい」 という方がおいでのことと思います。 中国側のスタッフと交流する絶好の機 会でもありますので、参加は歓迎。た だし、交通手段や訪問先のご都合な どもありますので、必ず事前にお問 合わせ、お申込みをしていただくよう お願いします。締切りは10月23日（月） です。人数が多い場合は先着順とさせ ていただくことがありますので、あ らかじめご了承ください。また、奈良参 観と川西市内見学はご遠慮ください。

■歓迎会のご案内■

- 日時：10月25日（水）19時～
- 場所：アサヒビアケラー（アベノセ ンタービル B1F。JR「天王寺」駅、 近鉄「阿倍野橋」駅スグ）
- 会費：3000円
- 参加申込み締切り：10月23日（月）

■交流会のご案内■

- 日時：10月28日（土）18時～20時
- 場所：アピオ大阪（JR環状線、地下 鉄中央線「森の宮」駅スグ）
- 会費：無料（食事はできません）
- ★現地の状況、緑化協力の進展などを 中国のスタッフから直接聞くチャン スです。申込みは必要ありません。

緑化への思いあらたに 黄土高原緑化報告会

夏のワーキングツアーで目にした忘 れられない光景があります。雨で水浸 しになった畑、崩れそうな村への道、 それを保守しにでてきたとおぼしき村 の人たちが、通りかかった私たちの車 を見てにこにこ笑っているのです。

「慣れっこになっちゃってるんだ」 反射的にそう思ったあと、厳しい環境 のなかを生き抜いていく底知れないパ ワーを、ひしひしと感じました。

そんな黄土高原ですすむGENの緑化 協力の状況報告会が、9月19日、アピ オ大阪で約40人を集めて開かれました。

夏のワーキングツアーのようすをお さめたビデオを上映したあと、まず春 のワーキングツアー第2班の団長、有 元幹明さんがツアーの報告をされました。それから、夏のワーキングツアー 団長でGEN代表の立花吉茂さんが、黄 土高原での緑化の可能性や今後とるべ き方向などについて述べられました。 樹木の育つところには樹木を、育たな

いところには草を、というように適地 適作を追求していけば緑化は可能であ るとして、今後の緑化活動の核となる 「地球環境林センター」の重要性を強 調されました。

GENの緑化協力ははじまったばかり です。失敗例は見えていても、成果が みえるには時間がかかります。そんな なかで、ワーキングツアーの参加者や 専門家など、さまざまな方の応援やご 意見をえて、この活動を息ながくつづ けようと思いをあらたにしました。



黄土高原に地球環境林センター誕生

センターの目指すもの 立花 吉茂 (GEN代表)

われわれ緑の地球ネットワークが黄土高原に緑を取り戻そうと中国側に協力しはじめてから3年半が過ぎ、ワーキングツアーによる協力も回を重ねたが、その間にいくつもの問題点が存在することに気づいた。まず、苗木の不足、それに、苗木活着率の低さ、苗木育成に必要な施設の予算の貧弱さ、造林技術者の不足、協力する人びとの生活難などなどである。そして昨年の専門家による調査では生育適地や不適地の判断、土壌の性質の特殊性などが指摘された。これらの問題はそう簡単に解決できる性質のものではないが、ひとつひとつ解決に向かって進むことが不可欠であることは論を待たない。これらの解決のために地球環境林センターが設立され、今年下半期から活動が開始されることになった。ここでは、緑化樹の苗木の育成のほかに村人の生活レベルの向上に役立つ杏などの果樹類の苗木の育成など緑化に直接係わりあいのある仕事をおこなうだけでなく、気候風土と作物や樹木との関係、適地適作の樹種の開発、土壌侵食や水害防止、土壌の特性、灌木や草の有効利用などの基礎的な調査、研究をおこない、これらを通じて緑化の指導者の養成も併せておこなうことを目指している。もちろん、日本側のワーキングツアーの宿泊、勉強、作業もできることになるだろう。その建物はすでにできあがっており、仕上げを待つばかりになっている。

センター業務の進行状況

大同市南郊区平旺の約7ヘクタールがセンターの敷地として決定したのは



牧草も緑化の重要な要素。試験栽培がはじまっている

昨年夏であり、8人の職員がすでに決定している。昨年のワーキングツアーの訪問後にこの計画が急速に進められ、今年度のワーキングツアーに参加してから、事務局の高見さんと数日居残って、中国側と話し合い、およそ次のようなことを決定した。

1. 人員構成と業務分担

研究部、育苗部、管理部に3分割して8名を適正配分する。

2. 3カ年計画の初年度(96年度)の事業計画

1) 山林樹木苗木育成

樟子松、油松、華北落葉松、ポプラ

2) 果樹苗木育成(台木)

アンズ、リンゴ、コナシ、ズミ、ヒメカイドウ、ニンヨウキョウ

3) 野菜、草花苗木育成

トマト、ニンジンほか

4) 研究温室の建設

約100平方メートル

3. 3カ年事業計画

1) 育苗部

山林樹木苗木の計画的生産

2) 研究部

新樹種導入計画、沙棘の繁殖調査

3) 管理部

施設充実の年次計画立案

4. 設備備品の年次別購入

外壁、堆肥舎、車庫、屋根付作業場、工作室、トラック、ジープ、運搬車、リヤカー、一輪車、耕耘機、播種機

5. 人事交流

大同傘下の技術者の研修会

ワーキングツアー参加者の研修会

6. その他

以上のような内容の検討がおこなわれてほぼ合意に達し、現在中国側から送られてきた予算案を日本式に修正する作業が進行中である。

いくつかの研究課題

このセンターでの仕事が軌道にのるには知識と技術のレベルアップが必要で、そのための指導者が欠けているのがもっとも気がかりである。例えば山



現地で使われている農機具類

西省の農民たちには、古くからやっている穀物栽培と原始的な果樹栽培の技術しか存在しないから、もっと高度のもっと細かい園芸技術が入り込む必要がある。例を挙げると、果樹の接ぎ木であるが、古い切り接ぎの方法しかやっていないようで、袋接ぎや緑枝接ぎなどの新しい方法はまだ知らないからである。また挿し木では、ミスト挿しや種類によっては密閉挿しが普通におこなわれる欧米や日本にはなっていないのである。また土壌に対する知識が全くないに等しい状態なのである。黄土高原の土が世界でも類を見ない細かい粒子から成り立っている、という自覚がない。したがって苗を深く植え、水を与えて足で強く踏んでしまうと根が酸素不足で窒息して枯れやすくなる。立派な接ぎ木苗を植えて、バケツに1杯の水を与えれば活着率は100%近いはずである。しかるに70%くらいしか活着していないのはこのためである。また、鉢栽培も同様である。鉢栽培では通気をはかる材料を混ぜてやらないと根の発達が悪くて育ちにくいのは常識であるが市内に咲かせていた丈夫な草花たちでさえ窒息している株が多かった。この対策には軽石を混ぜるのがきわめて有効であるから、これが安価に入手できることは非常にありがたい。

このように、技術上の基礎知識の勉強が必要なので、このセンターの職員のレベルが早く日本の世間並みに向上して、他の地域の人びとがここで習得して帰ることができるようになれば、緑化の仕事もぐんとスピードアップできるに違いないし、彼らの収入アップにもつながってくるであろう。

伝えよう森と沢

二風谷ワーキングツアー—感想文から

◇二風谷ワーキングツアーに参加して◇

大阪府 鳥塚 則子

新聞記事でツアーの案内を見つけた。2年前に一度訪れた“二風谷”にもう一度行きたくて、さっそく申し込んだ。アイヌ民族の文化にふれたかったことと、二風谷の自然について気がかりなことがあったからだ。

私のふだんの生活は、箕面の山に近いといえども自然にふれるということが全くといっていいほどない。しかし、このツアーに参加して、“森が生きている”ということを感じ、“人間は自然のなかで生かされている”ということを考えて。そして、そんな当たり前のことを忘れて過ごしている自分を悲しく思い、また、そんな気持ちがよみがえってきた自分をうれしく感じた6日間だった。

印象に残ったこと。いろいろとあるが、二風谷の朝焼けがとってきれいだ。山や空や雲が真っ赤に染まり、カムイがそこにいるような神聖な風景だった。眠い目をこすりながら貝澤さんの畑でとれたとうもろこしを食べた。甘くておいしかった。

アイヌ刺繍。いままでは眺めるばかりのアイヌ文様を自分でひと針ずつ縫っていく。だんだんできあがっていく文様を見ながら、アイヌの人びとについて想った。その後、資料館でアイヌ刺繍を見た。その見事な美しさに、自分で作ってみてはじめて味わいを実感した。

チプサンケ。カムイノミの真剣な祈りが目の前でおこなわれていることが信じられなかった。チセのなかでアイヌの人びとと踊っているうちになんだかとても楽しい気分になってきた。それにしてもすごい雨。激流の沙流川に転覆する舟がいくつもあった。今年のチプサンケは、26年間ではじめての雨だったそうだ。雨のなかのチプサンケもなかなか良いと思った。

山歩き。貝澤さんの説明を聞きながら道なき道を歩いた。貝澤さんの頭のなかには、ここにある自然のすべてが記憶されているのだろうと思いつつ必死で後をついていった。ある財閥のはげ山の姿を見て、人間はなんということをしているのだろうと思った。自然と共存するということからかけ離れた、愚かな行動に悲しくなった。4時間ほどの山歩きを終えて、貝澤さんの家の裏にたどりついた。私たちがキャンプをしたときの手作りトイレが見えてきて、なんだかほっとひと息ついた。



『植林』のために無惨なすがたに……

最後にツアーを終えて、私は一人でほぼ完成しつつある二風谷のダムを見にいった。沙流川が濁り、川の両岸はコンクリートで埋められていた。来年のチプサンケはどうなるのだろう。二風谷の自然はどうなるのだろう。アイヌの人びとの文化はどうなるのだろう。そんなことを思いながら、私にできることは何だろうかと考えていた。

◇ワーキングツアーという名の

ユカラ◇

大阪府 平石 清隆

在日朝鮮人が多く住む大阪に生まれ育ったのと、ことばのいろいろな面に興味をもっていただけ、差別と抑圧をうけてきたアイヌ民族の言語・アイヌ語をかじりだしてから13年、北海道ではじめてアイヌのひとたちと接するようになって7年がたつ。(中略)

アイヌ語の面から個人的な感想を。

「ニプスフム」(寒さで木が裂ける音)という表現を本で読んで知ってはいたが、今回有澤先生から、体験をもとにしたお話を聞きたいへんうれしかったこと。また「ウパシチロンヌフ(オコジョ)」という動物をはじめ(スライドで、ですが)見ることができたこと等、視野をひろげ、人におしえを乞うことの大切さをあらためて知ることができ、大変よかったです。後半の実習に参加できず、貝澤耕一さん一家との交流も十分にできなかったのは残念です。(後略)

◇ツアー日記◇

東京都 田村 昇

(前略)最後に一般論を述べる愚をお許しいただきたい。数年前、二風谷でアットウシを織っている女性から以下の趣旨の話聞いた。「伝統技術を継承しようとする場合、伝承者が存在し、後から続く者にやる気さえあれば、いくらでも伝承が可能であると思うかもしれない。けれども、材料が入手できなければいかんともしがたい」。これに対して、和人がなにをなすべきかについて、全く考えがよばなかった。

アイヌ民族に対して和人がなすべきことについて真剣に考え、具体的に行動したチコロナイの運動をはじめた方がたの知恵と行動力とに敬意を表するとともに、運動の持続的発展を祈る。



昨年はなかったのに、いつの間にか林道ができていた……

◇ツアー参加の感想と

今後の展開について◇

兵庫県 福神 岳史

ツアーに参加して、北海道の自然、文化にふれられたことがいちばんの収穫だったと思う。自分の場合はナショナルトラスト(5ページ中へつづく)



チコロナイ

第1号ナショナルトラスト買い取り地決まる！

武田 繁典 (GEN世話人)



●印のあたりが 買い取り予定地

「緑の地球」の9月号に転載した北海道新聞、9月2日の毎日新聞に載りましたように、念願のナショナルトラスト買い取り地が決まりました。

緑の地球ネットワークのなかで1992年の末に提起されて準備がすすみ、1994年12月10日に「世界の先住民の国際10年」の開始を期して、チコロナイ第1期計画の募金活動がはじまりました。GENの会員をはじめ、アイヌ民族

問題に関心をよせる人びと、マスコミなど多くの協力のおかげで、募金活動が順調にすすみました。9月25日現在256人で総額3,927,370円になりました。第1期計画の募金目標が300万円でしたので、大成功といえます。

買い取り対象の山林は、二風谷に住む元平取町町会議員の安田治男氏の所有地で、私たちのナショナルトラスト運動に理解を示して、売却して下さることになりました。沙流川の左岸で、シケレペツ沢から1キロほどはいったところで、小さな沢の横から尾根筋を越えたところまでの山林です。35年ほど前にカラマツを植林して5年ほど手入れされていたもので、それ以降放置されていたので雑木林になっています。30年ぐらいの小さなカツラやミズナラ、シナノキなども生えてきています。広

さは約3.4ヘクタールです。チコロナイの趣旨にそって適正に活用していくのに適した山林であると思われます。

「チコロナイ (私たちの沢)」の名にふさわしく、地元の人たちとじっくり話し合っって活用計画を立てていきたいと思ひます。また、貝澤正さんの遺された山の保全契約も同時にはじめていく予定です。

土地の買い取り手続きは、9月22日に、国土利用計画法にもとづく届け出が受理されたので、6週間以降に売買契約を締結する予定です。

また、第2期計画を12月10日からはじめるとの準備をはじめましたので、今後の進めかたなどについてのアドバイスやご意見をお寄せください。

以上、第1期計画に協力していただいた多くの方々に報告します。

(4ページ下から) 方面の興味から参加を考えたが、ツアーに参加することで、新たにアイヌ文化の方面にも興味をひろがり、幅広く自然、文化にふれあい、体験することができた。しかし、勉強不足のせいか、ナショナルトラストの意義、目的とアイヌ文化とのつながりについてはとらえきれず、せっかくいろいろな交流や文化体験をさせてもらっても、それが断片的に広がっているだけで、森を買おうとする熱意にうまく結びついていない状態である。そのため、今後はできるだけ自然、文化を体系的にとらえ、ナショナルトラストの必要性をしっかりと把握したうえで取り組んでいきたい。(後略)

◇残したい風景、作りたい森◇

北海道 高橋 伸枝

「2年ぶりにタニに行ける！」ほとんど、その一言だけでツアーに参加した私だった。二風谷ダムはどうなっているだろうか。いつも泊まった民宿の人たちは元気だろうか。そんなことが頭にうかんでくる。(中略)

が、である。24年間、自分を生かし

てきてくれた北海道の森については、何も知らないのだ。どんな木が原生種なのかもわからない。遠い関西の言葉も違う(と私には思える)人たちのほうが詳しいなんて！ 大阪や神戸の人たちが北海道の小さな町の山谷川に関心をもって活動していること自体が私には驚きだった。(中略)

なかでも印象に残っているのは、やはり森を歩いたことだ。富良野では2才のエゾマツがマッチ棒くらいの小ささなんだ、と驚いた。今年はキノコが多く、見ているだけで楽しかったし、トロロ昆布にそっくりなサルオガセを見つけるのも面白かった。露に濡れる森にいる間中、私は私らしくいられたと思う。レイチェル・カーソンの言った「センス・オブ・ワンダー」って、こういう気持ちのことなんだ、と実感した。シケレペツ沢を歩いたときは、子どものころ遊んだ室蘭の沢の風景に少しだけ似ていて、「この風景を失いたくない」と切実に思った。小学校のころに、護岸工事で永久に失われてしまったあの沢のよ

うすは、私の原風景のひとつだと思う。5才下の妹は、すでにふれることのできなかった「北海道」の姿。

ツアーから戻って忙しい日常に戻りたいま、私のなかに時折うかんでくるのは、2年経ってほぼ完成してしまったダムの冷たい姿でもなく、行きなれた民宿の部屋のようなすでもない。24年目にしてはじめて出会った「北海道の森」の姿だ。それは子どものころに失った風景に似た森。もう二度と手放したくない景色。そして、次の子どもたちのために作って、残してゆきたい森の姿だ。(後略)



買い取り予定地の山林を見る

厳冬をまえに大水害の黄土高原

高見 邦雄 (GEN事務局長)

大同地区が大水害にみまわれ、この冬をちゃんと越せるかどうか心配、というフックスを緑色地球ネットワーク大同事務所からうけとり、10月初めに急遽、被害の深刻な陽高県と天鎮県の4つの村を訪れました。

【長雨で土の屋根が落ち込む】

村へむかう車中で、黄土でつくった窯洞(ヤオトン)の90%以上が被災したという説明を聞き、1月の大震災で震度7を体験した私は、自分なりに大惨状を思い描いていました。しかし車窓の光景はそれほどでもありません。

いざ村にはいって農家に近づき、びっくりしました。どの家もどの家もアーチ型の土の屋根が落ち込み、部屋が埋まっています。落ちかかった屋根を懸命に丸太で支えている家もあります。降りつづいた雨が土の屋根に浸透し、突然、落ち込んでしまいます。外壁だけがもちこたえているために、遠くからでは被害が目につかないのです。



仮設小屋の前で。零下30度にもなる冬をここで過ごす

【全部の災害が1年に集中】

大同市の北部の県はことし、代表的な自然災害をすべて体験しました。

天鎮県を例にとると、春は中華人民共和国建国以来の大干ばつでした。去年の秋からほとんど雨が降らず、年初から6月17日までの降水量はわずか22mm。4万haの耕地の63%に種をまくことができませんでした。

そして夏は大水害です。7月中旬から9月上旬にかけて4回の大雨が降り、合計635mmに達しました。通常の年

間降水量の1.6倍の雨が短期間に集中したわけですから。そのために流された畑は2,300ha 水没した畑は3,230ha あわせると全耕地の14%になります。

とどめをさすかのように襲ってきたのが9月10日ごろの早霜です。90%以上の耕地が被害をうけ、野菜やナタネは枯れ死し、ジャガイモは腐りました。そしてそれらのあいだを縫ってヒョウまで降ったのです。

多くの村で、収穫は去年の30%くらい、あるいはそれ以下にしかならないとみられます。

【この百年になかった大水害】

被害の点でもっとも深刻なのは、やはり8月末から9月13日ごろまでつづいた大雨です。その深刻さ、広がりとも、この100年になかったことだといえます。

9月21日までにわかった大同市の被害は、倒壊した住居157,829室、危険な住居185,402室、住む家がなくなったのは38,896世帯141,303人に及びます。学校もたたく

さん倒壊し7,000人の学生が登校不能の状態です。幸いなことに、洪水とはちがって事態の進行がゆっくりであるため、死者は10名前後にとどまっています。

長雨がやんで、およそ半月たつてつぶれる家があり、10月にはいっても雨が降っていますから、さらに被害が拡大するおそれがあります。

家をなくした人たちは、急ごしらえの小屋で、折り重なるようにして生活しています。9月10日ごろ早くも氷点

下を記録し、24日には初雪がありました。厳冬には零下20~30度、山間では零下40度近くにもなります。

【厳寒の冬が近づいているのに】

陽高県、天鎮県などはもともと全国的な重点援助対象の県で、1人あたり年間所得が400元(1元=12.5円)もないところですが、村によっては200元以下のところもあり、今回訪れた村は、



屋根にあいた穴からポプラが見える

ことはまったく収入が見込めないようでした。食糧がいつまでつづくか、とても心配しています。

大同市も緊急の指揮部をおき、救援に力を注いでいますが、被害の深刻さと広がりに応じるのは容易ではないようです。

おのおの県でも赤刷りの「求援信」(援助を求める手紙)をだして、国内外の救援を求めています。北京あたりではあまり報道されていないように聞きました。中国全体で自然災害が日常化している、ということもあるのでしょう。

農民たちが思ったよりはるかに元気で、村のなかでたがいに助けあっているのには、救われる思いでした。

その一方で、水害のあと、レンガの価格が2倍近くに高騰しています。市場経済化がすすむなか、避けられないことかもしれませんが、「国民党時代と変わらないじゃないか!」という言葉、とてもつらい思いで聞いたものです。

【衣類などを届けようかという申し出もありますが、まだ対応できません。小学校再建のレンガを贈ることをはじめていますので、可能ならお金のかたちでお願いいたします。】



中国に留学しているWT経験者からお便りが届きました。林業の将来への思いを書いてくれた富樫さん、戦後50年について率直に書いてくれた日高さん、どうもありがとう。

戦後50年の中国から

日高 基 (大学生)

(前略) 今年を終戦50年で、中国のテレビは連日連夜、抗日戦争を扱ったドラマを放送し、中国人の国民感情を刺激しています。内容はズバリ、日本軍の血も涙もない鬼将校が、人のよさそうな人民や兵士を殺しまくって、最後は、おきまりのハラキリで日本兵士が次々に死んでいくというもの。日本人の私でも腹の立つような残虐ぶりです(韓国人のルームメイトが言うには「韓国のはこんなものじゃない」らしいです)。僕と話をする中国人は必ずと言っていいほど「テレビ見てるか?」ときいてきます。

僕は今年の2月末から7月のはじめまで旧満州国の首都長春(旧新京)にいたので、日本軍の残した戦争の爪あとを見てまわり、本もたくさん読んで(本当はちょっと)この戦争を正しく理解し、また日本人として、何をすべきかも心得ているつもりです。

実は中国に来るまで、撫順でおきた日本軍による3000人の大虐殺も知らなかったし、ハルピンの731細菌部隊にしても、話にきいても気にも留めなかった。これは僕だけじゃなく、僕と同じ世代に共通して言えることだと思う。多少生々しくても、日本は、戦争を知らない世代に戦争の真実を正しく、偽りなく教育する義務がある。事実を知った僕のすべきことは、せめて僕のまわりの人間だけにでも真実を伝えることだと、800体(3000体のうちの)の眠る骨池を前にして強く誓った。

日本にいるとき僕は、韓国や中国、その他日本の侵略をうけた国が日本に対し“賠償責任”を求めているニュー

スを聞いて「まだこんなこと言ってるの」と思ったのは事実です。だけど彼らの求めているのは、賠償という金銭的な問題もあるけれども、それ以前に日本国民の戦争にたいする正しい理解の欠如と、教育する義務を怠っていることに対する不満からくるものであり、日本はなんらかのかたちでこれに答えなければいけないし、国民もこういった問題に目をむけて“遠い昔の、遠い国のお話”ですまさないよう確固たる自覚が必要であると思う。前の韓国人のルームメイトからも、同じようなことを言われた。彼が最後に涙ながらに語った言葉がまだ忘れられない。「歴史は大切だ。韓国のどの家庭でも、日本をいいイメージで教育する家はない。うちも同じだ。だけど俺は若いから、もっと前の方に目を向けなければいけない。日本人といっしょに住んでる俺を快く思わない韓国人はたくさんいる。でもお前はいいやつだし、だからいっしょに住んでるんだ」。

……まあ、こんなふうな僕の考え方を家庭教師の女の子に激しく語ったあとで、普段からのこれらのテレビに対する不満をぶちまけた。日本人は“東洋鬼”とか、“日本鬼子”とか呼ばれていた。これを見た子どもはどう思うだろう。たぶん、その子どもが僕を見たときもこのテレビの日本人と同じように映るだろう。勇敢な解放軍兵士が極悪な日本人をやっつけて、その格好のよさといったら水戸黄門顔まけで、子どもじゃなくても、僕でもそんなヒーローになりたくなる。そのくせドラマ(ラブロマンスもあり)の終わりには「戦争はいけない」と言ってる。矛盾してる。そして中国人は、そのテレビを見て“どう思ったのか?”ときいてくる。僕は、なんと答えればいいのか?(後略)

林業の将来のために

富樫 智 (高校教員)

私は昨夏、中国・黄土高原緑化考察団に参加した後、学校で報告会をしたのですが、生徒でも興味のある子がけっこういて大成功でした。

今春、私は旭川の林業高校に転勤に

なり、今の林業高校には本気で林業を学ぼうという学生が少なく、日本の低迷した林業を救う人材を育てるにはまずは教師からということで、中国南京の林業学院に行こうと思い、いま南京師範大学で自費で言葉から勉強しています。今はまわり道でもそのほうが1人でも2人でも本気で林業を学んでくれる学生を増やすことができると考えたからです。それと、将来は日本という社会だけでは生きてはゆけない時代になると考えたからです。

私は今中国でひとつしかない水利の大学の、河海大学の留学生楼に住んでいます。緑化には水利はかせません。ここの大学では人工降雨の実験などいろいろなことをおこなっています。この中国の友人に話をしたところとても関心を示していました。

今は毎日毎日が勉強です。けれどもこの勉強が将来役に立てば、いいえ、必ず役に立つと信じてがんばっています。会員のひとりとして、応援しています。

学校のほうは一時退職あつかいとなり一切給料が入らないので、今年はネットワークの方には参加できないと思います。けれども同じ中国にいるので、また何かある時には、ここから山西省までは1日半ぐらいで行けると思うので情報をいただければ幸いです。植林活動の方は着実に進んでいると思いますが、みなさんくれぐれも体には気をつけてお過ごしください。(9月16日)



二風谷WT報告会に参加して 越智 誠

9月9日、19名の参加者のもとチコロナイの学習会がおこなわれました。今回は8月中旬から下旬にかけて二風谷周辺でおこなわれたワーキングツアーの報告として、撮影された写真、ビデオを鑑賞しました。まず、武田先生が撮られた写真をビデオテープに編集された苦心作を拝見しました。みなさんがアイヌの森を探索しているようすやアイヌの伝統儀式を真剣に見入っているようすがうかがえました。また、地元の人たちとの交流のようすも楽しそうでした。次に、岸上さんが撮影された動く映像を拝見しました。写真とはちがって落ち葉をふむ足音、小川のせせらぎ、楽しそうに談笑する参加者の声を耳にして、やはり報告はビデオにかぎる、とみなが実感しました。とりわけ圧巻だったのが、アイヌ舞踊です。私はアイヌの踊りをはじめて見ましたが、鶴の動作をまねた踊りの激しさに驚きました。

私もこの勉強会の2日後に北海道へでかけ、二風谷にも立ち寄りました。偶然にも「雑穀研究会」の人たちとご

いっしょする機会にめぐまれ、萱野茂さん所有のとうきび畑やあわ畑をみずから案内してくださいました。それらは沙流川のそばにあるのですが、そこもダムができると水没してしまうのではないか、という不安に駆られました。今回二風谷に行ってみて、森だけでなく、すべての自然をこれ以上破壊すべきではない、とあらためて思いました。

勉強会終了後、今後の活動方針について意見交換したあと、中華料理店「紅揚軒」で夕食をとり解散しました。

『チコロナイ』学習会のお知らせ

「国立民族学博物館見学と大塚和義教授のお話」

☆アイヌ民族に関する話を中心に、大塚先生に1時間ほど講義をしていただきます。そのあと博物館を見学します。

- 日 時：11月26日(日) 13時～
- 場 所：国立民族学博物館
- 参加費：300円(民博入場料別)
- 集 合：次号で案内します。
- 申込み締切：11月17日(金)(先着順)
- 申込み・お問合せはGEN事務所まで (TEL.06-583-1719)

自然ゆずをどうぞ

- 無農薬・有機栽培「自然ゆず」
- 2kg 箱詰 (17～18個入り) 1600円
- 送料別途 (関西620円)
- 出荷 10月25日～11月25日
- お申込みは田中隆一さんまで
〒781-84 高知県安芸郡東洋町甲の浦
TEL/FAX. 08872-9-2500
- ★無農薬なので皮も安心して食べられます。ご注文の際は「GENの紹介」とひとこと添えてください。

お詫びと訂正

37号、「陝北の村から...その1」のなかに、編集部によるミスがありました。中欄23行目「我們只好餓肚子」は正しくは「我們只好餓肚子」です。意味は、「我々は飢えるしかない」になります。お詫びして訂正いたします。

編集後記

黄土高原ワーキングツアーでいつもお世話になっている山西省の人たちが、いよいよ日本にやってきます。むこうでうける大歓迎の何分の1かでもおかせしなくっちゃ、と準備に余念のない毎日です。みなさんも中国のスタッフの顔を見にいっちゃいませんか。